

元総社蒼海遺跡群 (128)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 1 9 . 3

前橋市教育委員会

元総社蒼海遺跡群 (128)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 1 9 . 3

前橋市教育委員会

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感じられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、統く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、国府、國分僧寺、國分尼寺など上野国の中核をなす施設が次々に造されました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎧をけずった地として知られ、近世においては、諸代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元総社蒼海遺跡群（128）は古代上野国の中核地域の調査であり、上野国府推定地域にも近接することから、調査成果に多くの注目を集めております。今回の調査では、国府そのものに関連する遺構の検出、確認はかないませんでしたが、古墳時代の畠跡や平安時代の水田跡等が検出され、時代を跨ぐ生産の場であった状況が確認されました。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成31年3月

前橋市教育委員会
教育長 塩崎政江

例　　言

1 本報告書は前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う元総社蒼海遺跡群（128）埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2 発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡名　　元総社蒼海遺跡群（128）（前橋市遺跡コード 30A236）
遺跡所在地　群馬県前橋市総社町総社 3137-1 ほか
監督指導　　並木史一（前橋市教育委員会）
発掘・整理担当　岡野 茂（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間　平成 30 年 9 月 10 日～10 月 31 日
整理・報告書作成期間　平成 30 年 11 月 1 日～平成 31 年 3 月 12 日
調査面積　　648.05 m²

3 本書の編集は岡野が行い。原稿執筆は I を並木史一、他を岡野が担当した。

4 発掘調査・整理作業参加者は次のとおりである。

大川明子（技研コンサル株式会社） 安藤三枝子 飯塚美奈子 楠原義久 遠藤好則 加藤知恵子
鶴田栄作 河本ちさと 北爪二郎 桑原 褒 今野妙子 設樂和男 杉田友香 関根信子 曾根 裕
高野フミ子 多田ひさ子 田所順子 田部井美砂子 中嶋智恵子 南雲富子 西潟 登 橋田 環
星野 博 細野竹美 水落建哉 村田稔男 山口直子 吉田俊宏

5 本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会で保管している。

6 下記の諸機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。

並澤泰史 株式会社萩原土木 山下工業株式会社

凡　　例

1 押図中に使用した北は座標北である。

2 押図に国土地理院発行 1/200,000 「宇都宮」「長野」、1/25,000 「前橋」、前橋市発行 1/2,500 都市計画図を使用した。

3 遺構名称は、住居跡：H、溝跡：W、土坑：D、ピット：P である。

4 遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。

遺構　住居跡・水田跡・畠跡・溝跡・土坑・ピットほか・・・1/30、1/60、1/100　全体図・・・1/200
遺物　土器・・・1/3、1/4　鉄滓・・・1/4

5 本文および表中の計測値については（ ）は現存値を、〔 〕は復元値を表す。

6 遺構図・断面図のトーン表現は以下の通りである。

遺構・・・焼土範囲：■ 断面・・・VI層：■ X 層：■ 畠跡：■

目 次

はじめに

例言・凡例

I	調査に至る経緯	1
II	遺跡の立地と環境	2
III	調査の方針と経過	8
	調査範囲と基本方針	8
	調査経過	8
IV	基本層序	8
V	遺構と遺物	11
	1. 調査の概要	11
	2. 1面	11
	3. 2面	11
VI	まとめ	19

挿図目次

Fig. 1	遺跡の位置	1
Fig. 2	前橋の地形	2
Fig. 3	周辺遺跡図	3
Fig. 4	周辺調査地点とグリッド設定図	7
Fig. 5	基本層序	9
Fig. 6	1区全体図	9
Fig. 7	2区全体図	10
Fig. 8	1区 As-B下水田跡	13
Fig. 9	2区 As-B下水田跡	14
Fig. 10	2区畠跡(FA混畠跡)	15
Fig. 11	2区畠跡(C混畠跡)、2区W-4・5号溝跡、2区D-1号土坑、1区P-1~8号ピット	16
Fig. 12	2区H-1号住居跡	17
Fig. 13	1区炉跡	18
Fig. 14	遺構分布図	19

表目次

Tab. 1	周辺遺跡一覧表	4
Tab. 2	溝跡・土坑・ピット一覧表	18
Tab. 3	出土遺物観察表	18

写真図版目次

PL. 1	1区北As-B下水田跡全景(北から) 2区As-B下水田跡全景(南から) 2区W-1・2・3号溝跡全景(北から) 基本層序①(東から) 基本層序②(南から) 基本層序③(南から) 2区As-B下水田跡作業風景(南から)	
PL. 2	1区北2面全景(北から) 1区中央2面全景(東から) 2区FA混畠跡全景(南から) 1区炉跡铁滓出土状況(西から) 2区W-4号溝跡全景(北から) 2区FA混畠跡作業風景(北から) 2区W-5号溝跡・C混畠跡全景(北から)	
PL. 3	2区H-1号住居跡全景(西から) 2区H-1号住居跡貯藏穴全景(南から) 2区H-1号住居跡遺物出土状況(西から) 2区H-1号住居跡遺物出土状況(南から)	

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元總社蒼海土地区画整理事業に伴い実施され、20年目にあたる。本調査地は、周辺で埋蔵文化財調査が長年にわたって行われていることから、遺跡地であることが確認されている。

平成30年5月14日付で前橋市長 山本 龍（区画整理課）（以下「前橋市」という。）より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が、前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することになった。同年9月7日付で前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。

遺跡名称「元總社蒼海遺跡群(128)」（遺跡コード:30A236）の「元總社蒼海」は土地区画整理事業名を採用し、「(128)」は過年度に実施した発掘調査と区別するために付したものである。



Fig.1 遺跡の位置

II 遺跡の位置と環境

遺跡の位置 (Fig. 1) 元総社蒼海遺跡群 (128) は、前橋市街地から利根川を隔て西へ約 36km の地点、前橋市元総社町地内に近接して所在する。遺跡地の西侧には関越自動車道が南北に、南側には国道 17 号、主要地方道前橋・群馬・高崎線が東西に、また東には市道大友・石倉線が南北にそれぞれ走っている。

遺跡は、榛名山山麓の相馬ヶ原扇状地端部と前橋台地との移行地帯に立地する。遺跡周辺には、相馬ヶ原扇状地の伏流水を水源とする牛池川、染谷川が流れている。これらの河川の開析作用によって細長い微高地と低地が多く形成されており、その比高差は 3~5m を測る。遺跡が立地する周辺は主に畑地として利用されていたが、前橋市中心部から続く市街地の西端にあたり、近年では元総社蒼海土地区画整理事業の進展によって宅地や商業施設が立ち並び、市街地化が拡大している。

歴史的環境 (Fig. 3・Tab. 1) 本遺跡が所在する元総社地域は、上野国府推定地や上野国分寺・国分尼寺を中心に連続と遺跡が広がる地域であり、関越自動車道建設や区画整理事業などに伴う発掘調査が行われ、多くの遺構が確認されている。本遺跡周辺地域における時代毎の遺跡の概要は以下の通りである。

(1) 織文時代 八幡川右岸の微高地に上野国分寺・國分尼寺を中心とした連続と遺跡が広がる地域であり、関越自動車道建設や区画整理事業などに伴う発掘調査が行われ、多くの遺構が確認されている。本遺跡でも織文時代前期から中期にかけての遺構を確認している。

(2) 弥生時代 日高遺跡 [18] [19] ・上野国分寺・國分尼寺中間地域 [22] ・元総社小見三遺跡 [59] ・元総社蒼海遺跡群 (24) などがあるが、その分布は散在的である。この内、日高遺跡では浅間 C 軽石下の水田跡が確認されており、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて継続して営まれた水田と捉えられている。

(3) 古墳時代 本遺跡周辺は県内でも有数の古墳密集地域であり、それを代表するものとして元総社古墳群が挙げられる。古墳時代後期・終末期に亘り、王山古墳 [7] ・元総社二子山古墳 [12] ・愛宕山古墳 [10] ・宝塔山古墳 [13] ・蛇穴山古墳 [8] などの首長墓が多数築造された。また、この時期には山王庵寺 [4] が建立され、元総社古墳群を含め、政治的中枢地域となる。

山王庵寺は昭和 3 年に日枝神社境内が「山王塔址」として国指定史跡となり、その後昭和 49 ~ 56 年にかけて 7 次にわたる本格的な発掘調査が行われた。この調査で金堂の検出および「放光寺」題書の平瓦出土により山王庵寺が「山ノ上碑」「上野国交替実録帳」にみられる「放光寺」であることが有力視されるようになった。平成 9 ~ 11 年の調査でも土坑から大量の塑像が出土し、平成 18 ~ 19 年度調査では北・東・西面、平成 20 年度調査では南面の回廊を検出している。さらに平成 21 年度調査では「推定中門」と「西側南側回廊」の周辺部が、平成 22 年度調査では北西隅の回廊と接するように「基壇建物跡」と「北方建物群」が確認されている。なお、この寺の塔心礎や石製鷲尾、根巻石等の石造物群は宝塔山古墳の石棺や蛇穴山古墳の石室と同系統の石造技術に



Fig. 2 前橋の地形

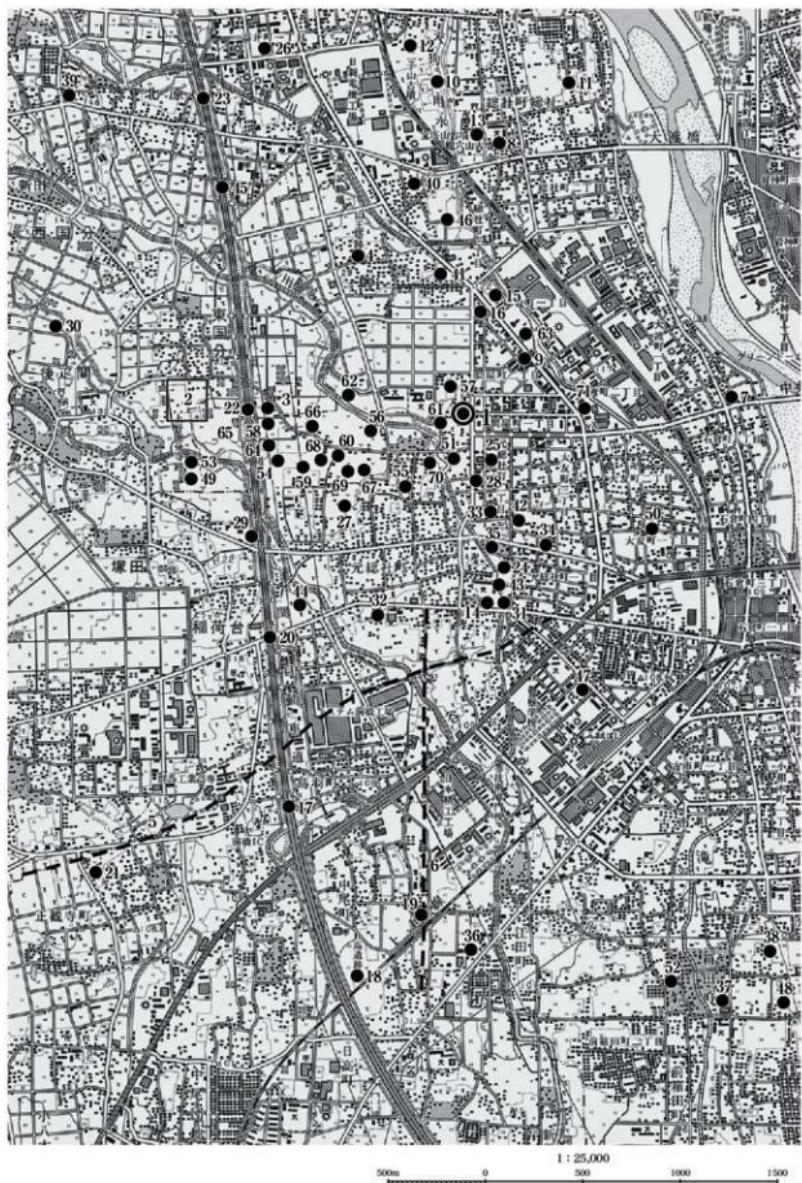


Fig. 3 周辺遺跡図

よるものと考えられており、仏教文化と古墳文化とが併存しながら機能していた様子が窺える。

この時代の集落は牛池川と染谷川に挟まれた台地上に展開しているが、前期～中期の集落は散見される程度で、後期からの集落増加が看取できる。生産域としては、牛池川左岸一帯に広がる低地平野において、元総社明神遺跡、元総社北川遺跡、総社閑泉明神北IV・V遺跡などで水田跡が確認されている。

(4) 奈良・平安時代 奈良時代には上野国府が造営され、上野国分寺〔2〕・国分尼寺〔3〕の建立に示されるように、本遺跡周辺は古代の政治・経済・文化の中心地として再編成される。

上野国府は本遺跡付近の区域に約900m四方に推定され、関連遺跡として元総社小学校校庭遺跡〔14〕では県下最大級の掘立柱建物跡が検出され、元総社蒼海遺跡群(99)・上野国府等範囲調査確認28・33・34トレンチでは掘込地業を持つ建物跡が、元総社蒼海遺跡群(95)では方形の柱穴掘り方をもつ大型掘立柱建物跡が確認されている。元総社寺田遺跡〔43〕では「國府」・「曹司」・「國」・「邑尉」などの墨書き土器や人形が出土している。元総社明神遺跡〔24〕では南北方向の溝跡、閑泉橋遺跡〔25〕や元総社蒼海遺跡群(7)・(9)・(10)では東西方向の溝跡が確認され、国府域の外郭線の想定が為されている。また、周辺遺跡からは円面鏡や綠釉陶器、巡方(腰帶具)なども出土しており、国府を考える上で貴重な資料となっている。

国分僧寺は大正15年に国指定史跡となり、昭和40年代から部分的な発掘調査が進められるようになった。昭和55年以降には本格的な調査が始まり、主要伽藍の礎石・塀垣・堀等が確認されている。また、平成24年度から28年度にかけての第2期発掘調査において、これまでの金堂が講堂であったことが判明する等、伽藍配置の変更が行われている。国分尼寺は昭和44・45年のトレンチ調査により伽藍配置が推定され、その後平成12年度に前橋市埋蔵文化財発掘調査團により南辺での寺域確認調査が行われた。調査の結果、南東・南西隅の塀垣と、それに平行する溝跡や道路状遺構等が確認されている。また、高崎市教育委員会による平成28年度の調査で講堂跡が尼坊跡であったことが判明し、平成29年度の調査では回廊跡の一部が確認されている。関連遺跡としては鳥羽遺跡〔20〕で神社遺構と工房跡が確認され、上野国分僧寺・尼寺中間地域〔22〕では大規模な集落・掘立柱建物跡群が検出されている。また、近郊にはN・64°・E方向に東山道(国府ルート)が、日高遺跡〔19〕では幅約4.5mの推定日高道が国府方向へ延びると推定されている。

当該期の一般的な集落は、古墳時代と同様に牛池川と染谷川に挟まれた台地上に立地するが、国府推定域の中心部での分布は少なく、国府域と居住域の区分けが看取できる。近年の調査による元総社蒼海遺跡群(40)で8世紀後半の住居跡内の一角に鍛冶遺構が検出されている。元総社蒼海遺跡群(41)では9世紀後半の鍛冶工房が検出され、同遺跡からは金の付着した灰釉陶器や奈良三彩といった貴重な遺物が出土している。また、元総社蒼海遺跡群(64)では8世紀前半には廃続されたと考えられる製鉄炉跡(箱型炉)が1基、元総社稻葉遺跡〔47〕では10世紀に想定される製鉄炉跡(小型自立炉)が2基確認されている。

(5) 中世 室町時代になると上野国守護上杉氏から守護代に任命された長尾氏が蒼海域を本拠地としこの地を治めた。元総社蒼海遺跡群では蒼海域の堀跡が多く検出されており、12～15世紀の青白磁梅瓶、青磁酒会壺・袴腰香炉などの貿易陶磁が多数出土している。天正年間以降は諂訪・秋元氏が蒼海域に入り当地の領主となるが、慶長6年(1601年)に秋元長朝が總社城に移ると同時に蒼海域は廢城となった。また、当該期の周辺遺跡では大渡道場遺跡〔71〕の貨幣理納遺構から572枚におよぶ銭貨が捲紐を通した「縦」の状態で六縦出土している。

Tab. 1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	元総社北川遺跡(128)	11	鬼伏山古墳	21	正統寺墓地I・II	31	今井遺跡
2	上野国分寺跡	12	船形二子山古墳	22	上野国分寺跡・尼寺中間地跡	32	六神遺跡・Ⅱ遺跡
3	上野国分尼寺跡	13	支倉山古墳	23	元京遺跡	33	冠能遺跡・Ⅲ遺跡
4	山の寺跡	14	大河原山・小笠原地遺跡	24	近江守明神遺跡I・II遺跡	34	保原遺跡
5	東山道(確定)	15	鬼伏山古墳	25	御前山遺跡	35	人丸尾遺跡・Ⅱ遺跡
6	日高遺跡(確定)	16	鬼伏山古墳	26	鬼木遺跡・Ⅱ遺跡	36	鶴ノ門跡
7	山古墳	17	千原遺跡	27	竹内跡	37	村前遺跡
8	船穴山古墳	18	日高遺跡	28	御前山古墳	38	丘見山遺跡
9	福山山古墳	19	日高遺跡	29	鬼伏山古墳	39	柳原分霊廟・Ⅱ・Ⅲ遺跡
10	鬼伏山古墳	20	鳥居遺跡	30	佐正御遺跡I・II	40	村前遺跡
							50 大丸尾遺跡

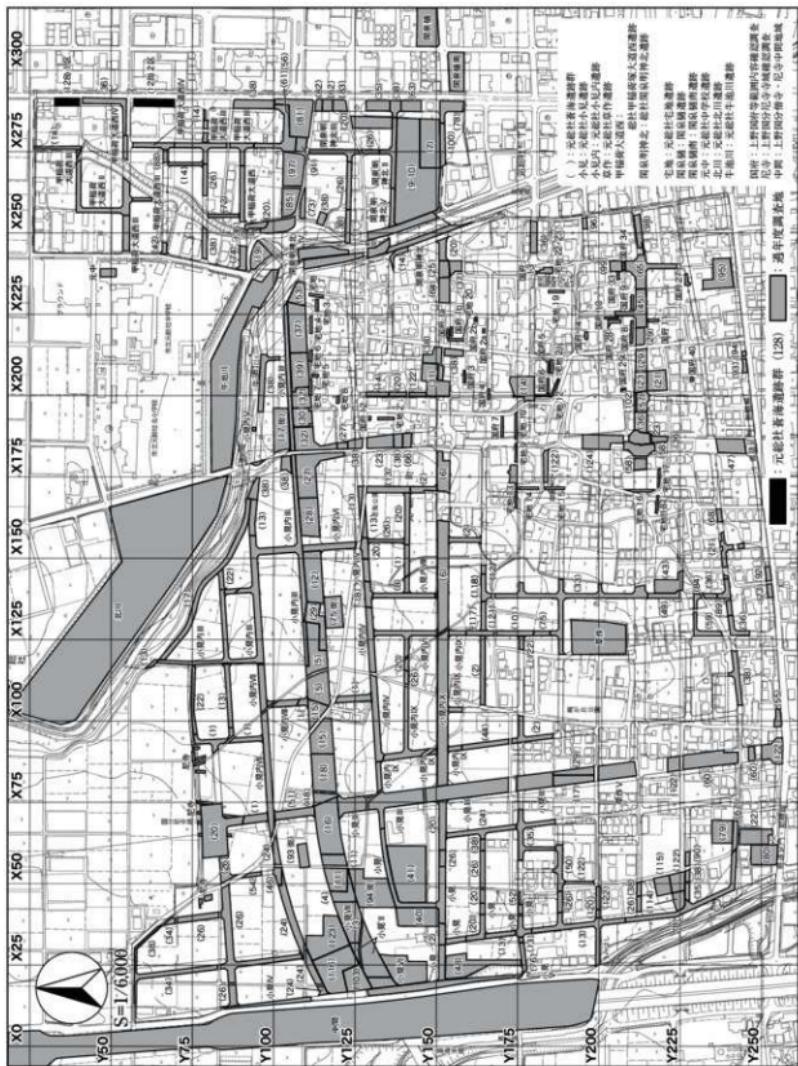


Fig. 4 周辺調査地点とグリッド設定図

III 調査方針と経過

1 調査範囲と基本方針

委託調査箇所は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業地内であり、調査面積は 648.05 m²である。グリッド座標については国家座標（日本測地系第IX系）X = 44000.000、Y = - 72200.000 を基点とする 4 m ピッチのものを使用し、経線を X、緯線を Y として北西隅を基点に番付して呼称とした。調査区の公共座標は次のとおりである。

測点	日本測地系（第IX系）	世界測地系（第IX系 测地成果 2011）
(128) X 33, Y 290	X = 43868.000 m, Y = - 72120.000 m	X = 44222.895 m, Y = - 71331.763 m

発掘調査は遺構確認面まで重機（0.45 m³バックホー）にて表土掘削を行う。遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、測量・写真撮影の手順で実施した。遺構調査については土層の堆積状況を確認するため、土層ベルトを適宜設定した。なお、出土遺物に関しては、床面直上や遺構に伴うと判断したものはNo遺物とし、他の覆土中の破片等について一括遺物として取り上げた。

2 調査経過

平成 30 年 9 月 12 日から 17 日にかけて、プレハブ設置・調査区設定・器材搬入等の準備作業を行った。18 日より 2 区から発掘調査を順次開始した。

2 区 9 月 18 日から重機での表土掘削を開始し、同日から作業員による遺構確認・掘削作業を行なった。9 月 26 日、1 面目の調査区全景撮影。同日、重機での 2 面目の掘削を開始し、作業員による遺構確認・掘削作業を行った。10 月 15 日に調査区全景撮影。19 日に調査終了。

1 区 10 月 10 日にアスファルト舗装の除去作業を行い、11 日から重機での表土掘削を開始した。排土置場の関係により 3 分割し、南→北→中央の順番で調査を実施した。各個、発掘調査の手順を踏み、南側が 11 日から 17 日まで、北側が 17 日から 23 日まで、中央部が 23 日から 26 日まで行った。26 日より埋め戻し・器材搬出等を開始し、30 日に現地での調査を終了した。

IV 基本層序

基本層序は 3ヶ所で観察を行った。①が 2 区南西壁、②が 2 区北壁、③が 1 区北壁である。各地点の断面図をもとに模式図を作成した。（Fig. 5）

I・II 層は造成土、III 層は旧表土である。IV・V 層は中世以降に堆積した As-B 軽石混土層で、軽石の多寡によって区分される。VI 層は As-B 軽石層で純層を示すユニットは確認できなかった。VI 層の堆積状況は、①周辺では薄くブロック状に堆積し、堆積厚は 4 cm 程であった。②・③では堆積厚が 10 cm 程確認されている。なお、VI 層下面を遺構確認面 1 面目とした。VII 層は As-B 軽石下水田の耕作基盤土層となっている。VIII・IX 層は洪水が起因とする Hr-FA の混土層で Hr-FA の多寡によって区分される。Hr-FA 混土層下面を遺構確認面 2 面目とした。IX 層は VII 層より Hr-FA を多く含んでおり、③の西側で部分的に確認した。X 層は Hr-FA の二次堆積層で②・③付近で鳥状に確認された。XI～XIII 層は所謂「C 黒」と呼ばれる As-C 軽石混土層である。XI 層は XIII 層と酷似するが黄褐色粒が含まれるため、2 面で確認されている畠跡の耕作の影響を受けたと考えられる。XIII 層は As-C 軽石を多量に含んでおり、③の東で部分的に確認された。As-C 軽石混土層下面から総社砂層上面（XIV・XX 層）までは、本調査区や周辺遺跡の総社砂層上面標高を見ると、1 区から 2 区にかけて緩やかな谷地形になっており、谷底に近い①・②では黒ゴク土から総社砂層漸移層まで XIV～I 層から成し、80 cm 程堆積しているのが確認されたのに対し、斜面上にあたる③では A 総社砂層漸移層（XII 層）が 20 cm 程堆積している状況であった。

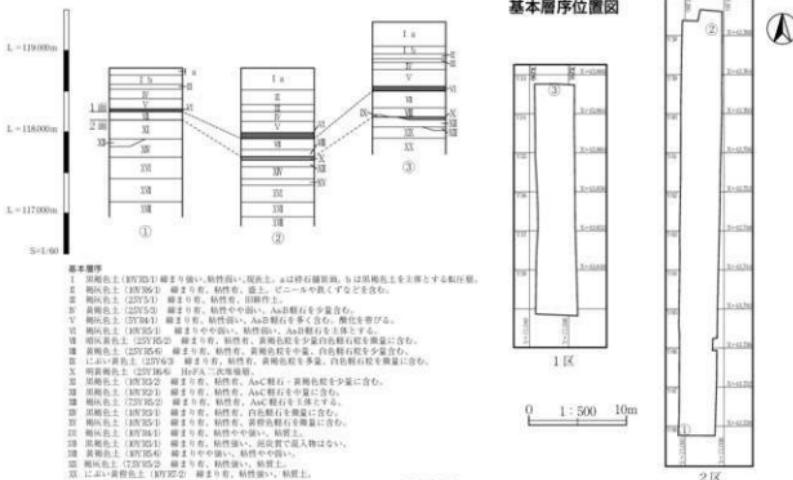


Fig. 5 基本層序

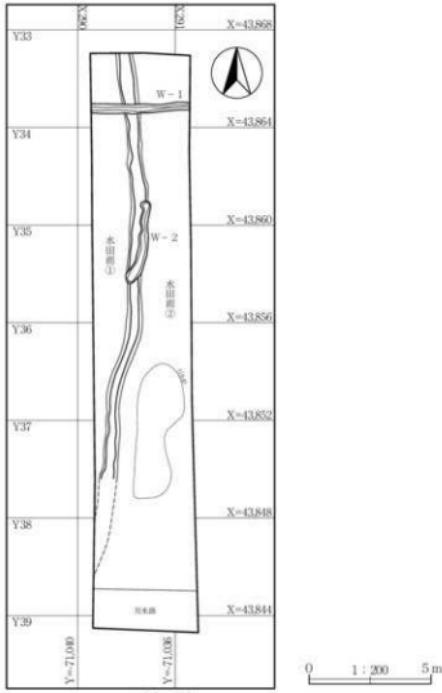


Fig.6 1区全体図



1区2面

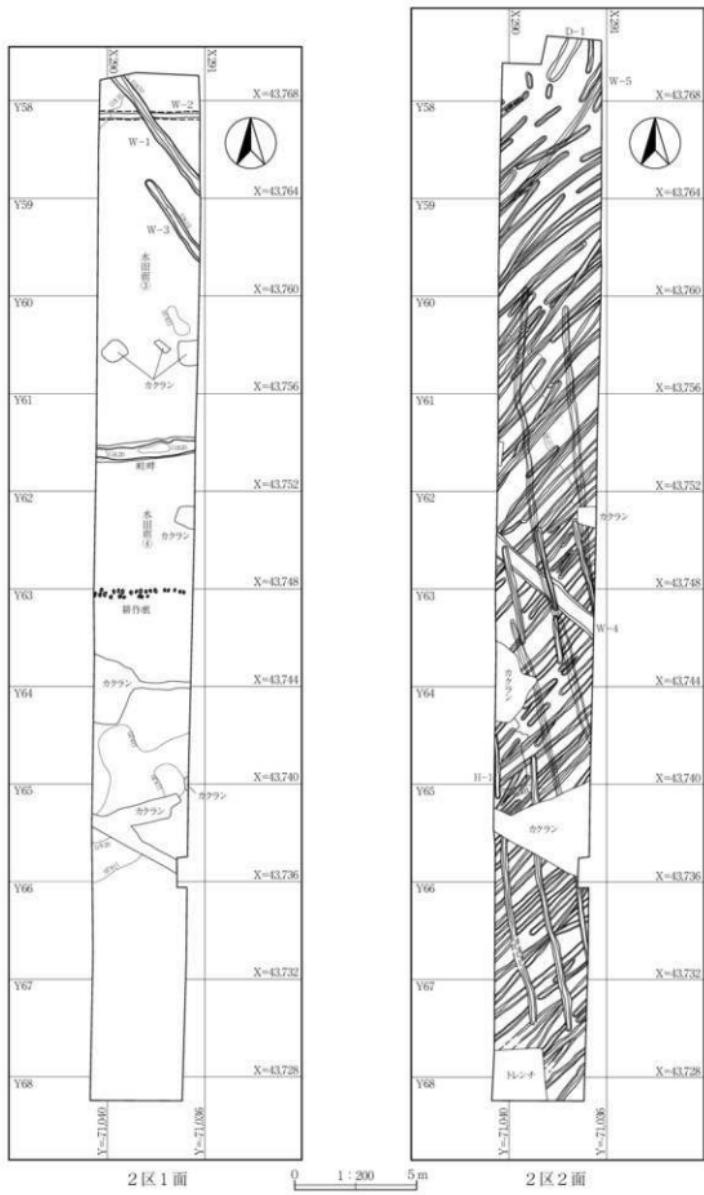


Fig. 7 2区全体図

V 遺構と遺物

1. 調査の概要

1面では1・2区共に、天仁元年（1108年）に浅間山の噴火により降下したAs-B軽石に直接被覆された水田跡と上位から掘り込まれた中世以降の溝を検出している。2面はHr-FA混土層（VII・IX層）下面を確認面とし、1区では鉄滓を伴う炉跡とピットを検出した。2区では調査区全域に亘る畠跡と溝跡・土坑・畠跡の下から古墳時代後期の住居跡を検出している。

2. 1面

（1）1・2区 As-B軽石層下水田跡 (Fig. 6・7)

1区では確認面の標高118.4mで水田面を検出しておらず、北から南へ向かってわずかに傾斜する。As-B軽石層（VI層）は8cm～12cm程、確認されている。水田区画は2区画検出したが、規模は1区画の面積を完全に計測できるものはなかった。検出した範囲で①が16.318m²、②が71.46m²である。畦畔は1本を検出した。規模は検出長で21.47m、N-17°-W方向にやや湾曲しながら走向する。上端は0.14～0.28m、下端は0.51～0.76m、比高差は水田面①側で0.01～0.05m、水田面②側0.03～0.05mを測る。水田面①・②からはわずかな凹凸は見られるものの、足跡や耕具痕等の痕跡は検出できなかった。

2区では確認面の標高118.2mで水田面を検出しておらず、南から北へ向かって緩やかに傾斜する。As-B軽石層（VI層）は2cm～14cm程、確認されている。水田区画は2区画検出し、規模は1区画の面積を完全に計測できるものはなかった。検出した範囲で①が63.554m²、②が97.091m²である。畦畔は1本を検出した。規模は上端0.32～0.68m、下端0.67～0.82mを測る。東西方向N-86°-Eに指向する。比高差は③と④では差が大きく、水田面③側で5～8cm、水田面④側で1～3cmを測る。As-B軽石堆積状況も③では10cmの厚みを超え、④では2～4cmと薄かった。③ではわずかな凹凸は見られるものの、足跡や耕具痕等の痕跡は検出できなかった。④では畦畔近辺で耕具跡を2列検出したが、As-B混土を覆土としており、水田跡に伴うものではないと考える。

出土遺物 土器・須恵器の小片が少量、2区水田面③から軒丸瓦が出土したが、図示には至らず。

（2）溝跡 (Fig. 6・7、Tab. 2)

溝跡はいずれもAs-B軽石層上位から掘り込んでおり、中世以降と想定される。「Tab. 2 溝跡・土坑・ピット計測表」を参照のこと。

3. 2面

（1）2区畠跡 (Fig. 8・9、Tab. 2)

VII層下からFA混畠とC混畠跡が調査区全域で確認された。

FA混畠跡

FA混畠跡は北から南に指向する①と東北から南西に指向する②に別けられる。①はサク痕跡6条検出した。軸方向N-173°-Eで等高線に並行する。上幅0.06～0.14m、下幅0.18～0.26m、深さ0.04～0.07m、サク間幅12mを測る。覆土はVII層土を主体としており、②を掘り込んでいる。底面は浅い凹みが連続して見られる。②はサク痕跡76条検出した。軸方向N-42°-Eを主体とし、等高線に直行する。上幅0.21～0.32m、下幅0.06～0.26m、深さ0.05～0.14m、サク間幅0.86～1.48mを測る。覆土は灰黄褐色土を基調とし、搅拌されたX層土を含む。底面は半月状の耕作跡と思われる凹みが多数見られた。H-1と重複する。H-1覆土上面を掘り込むため、新旧関係はH-1→本遺構である。 出土遺物 サク間から丸底で口縁が内湾する土器器皿（1）が出土してい

る。遺物は土師器が大部分を占めるが、須恵器・埴輪の小片も僅かに見られた。

C 混晶跡

H-1 を確認するため、XII層下面まで掘り下げたところ、3条検出した。軸方向N-176°-E、上幅0.26~0.32m、下幅0.08~0.21m、深さ0.08~0.15m、サク間幅1.4mを測る。覆土は黒褐色土を基調とし、XI・XII層よりもAs-C軽石が多く、Hr-FAの混入は見られなかった。底面は浅い凹みが連続する。出土遺物 土師器・繩文土器の小片を少量出土した。

FA 混晶跡とC 混晶跡の時期

畠跡は土層・確認状況からC混晶跡→FA混晶跡②→FA混晶跡①で耕作されている。C混晶跡はH-1(6世紀中葉)に掘り込まれていることや、覆土中にX層土が混入していないことから6世紀中葉以前に耕作された畠と想定される。FA混晶跡②は軸方向から周辺で確認されている畠跡の一部と考えられ、7世紀代の年代観が与えられている。本調査区でも、H-1が廃絶後にFA混晶跡②が開削されているのを確認しているため、この年代観と一致する。FA混晶跡①はVII層土を主体としているため、VII層上位から掘り込まれたものと考える。両者とも7世紀代に帰属すると想定される。

(2) 2区 H-1号住居跡 (Fig.10)

2区1面でカクラン除去作業時に壁面から住居跡を確認した。2面確認面ではFA混晶が全面に展開しており検出が困難であった。そのためFA混晶の調査終了後にC混土(XII層)下面まで掘り下げて遺構を検出した。

位置 X289・290、Y64・65 規模 東西方向 [1.19] m、南北方向 [2.87] m、現壁高0.43m。面積 [3.41] m² 主軸方向 N-77°-E 床面 カマド前部は硬化し、褐灰色粘質土の貼床が施されている。重複 FA混晶と重複する。新旧関係は本遺構→FA混晶である。覆土 1層はFA混晶の耕作土層(XI層)と同位にあり、殆ど同質であったが焼土粒の有無が見られた。2層以下はAs-C混土を基調とし、X層の堆積は確認できなかった。カマド 位置は近隣の調査事例から、東壁やや南寄りに位置にすると推測される。確認長1.42m、袖は残存長で右(南)が0.31m、左(北)が0.37m、煙道は壁面上部に0.36m突出している。天井部は焚口の西側へ崩落している。構築材として灰白色粘土が使用されている。貯蔵穴 南東隅に位置する。長軸0.92m、短軸0.68m、深さ0.42m。平面上端部は方形、中段下位は楕円形、断面は箱形を呈する。出土遺物 カマド前から土師器壺(1・2)・高杯(3・4)・甕(5)を出土した。壺は1が丸底で口縁が内湾する。高杯は杯部口縁が外傾する。3は脚部が直立し、裾部が「ハ」の字に広がる。甕は胴部が球胴状を呈する。6世紀前半から中葉にかけての土器が中心である。時期 出土遺物と重複関係から6世紀中葉と想定される。

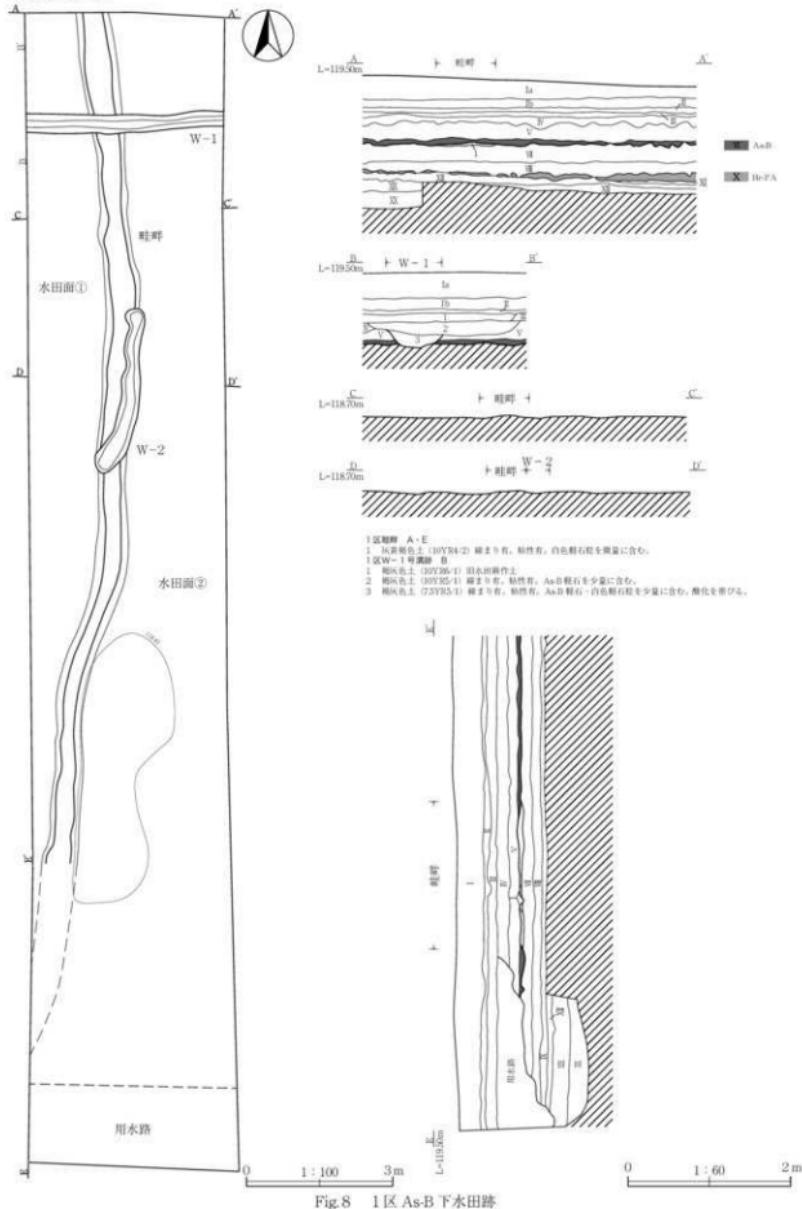
(3) 1区炉跡 (Fig.11)

1区中央(X290、Y36)でHr-FA混土層VII層から掘り込む鉄滓を伴う円形状のプランを検出した。トレンチを設け鉄滓が浮き出る状態まで掘り下げたところ、底面が焼土化しているのを確認した。覆土 VII層ベースにしたノロ状の土。 規模 長軸1.57m、短軸1.01m、深さ0.07m楕円形の浅い窪みに、中心付近に長径0.64mの楕円形の焼土域を検出した。焼土の厚さは2cm程度であった。また、北西側に同規模の窪みを確認している。出土遺物 土師器小片を少量と鉄滓(合計22.8kg)を出土している。炉底部分と想定される輪形状の鉄滓(1)図示。時期 時期を示す遺物は出土しなかったが、畠跡と同じ堆積層位にあることから7世紀以降と考えられる。備考 炉跡周辺からは鍛造作業の際に発生する鍛冶滓や鍛造片は検出できなかった。出土した鉄滓は拳程の大きさで表面が爛れたものが多く、ごく僅かだか粉炭と焼結した砂鉄の葉理構造を持った滓が含まれている。鉄滓の自然化学分析を行っていないため言及することはできないが、滓の構成から精練工程で使用されると想定される。

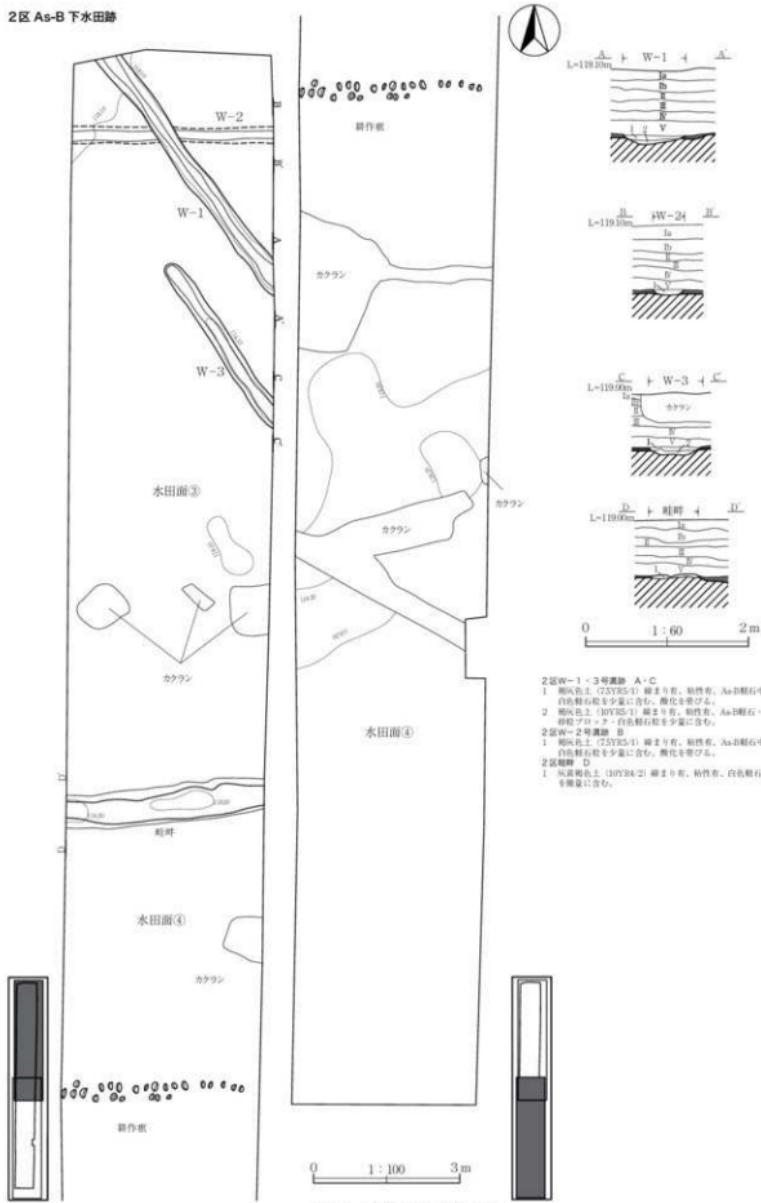
(4) 溝跡・土坑・ピット (Fig. 6・9・Tab. 2)

溝跡・土坑・ピットについては、「Tab. 2 溝跡・土坑・ピット計測表」を参照のこと。

1区 As-B 水田跡



2区 As-B下水田跡



- 2区W-1・3号測定 A-C
 1 剥離岩上 (T3YS3-1) 岩手石、粘性石、As-B粗石中。
 2 剥離岩上 (T3YS3-2) 剥離岩有、粘性石、As-B粗石中。
 3 剥離岩上 (T3YS3-3) 剥離岩有、粘性石、As-B粗石中。
 2区W-2・4号測定 B-D
 1 剥離岩上 (T3YS3-1) 剥離岩有、粘性石、As-B粗石中。
 2 剥離岩上 (T3YS3-2) 剥離岩有、粘性石、As-B粗石中。
 2区W-3・5号測定 C-E
 1 剥離岩上 (T3YS3-1) 剥離岩有、粘性石、As-B粗石中。
 2 剥離岩上 (T3YS3-2) 剥離岩有、粘性石、白色粗石松
生長量に含む。

Fig. 9 2区 As-B下水田跡

2区晶跡 (FA混晶跡)

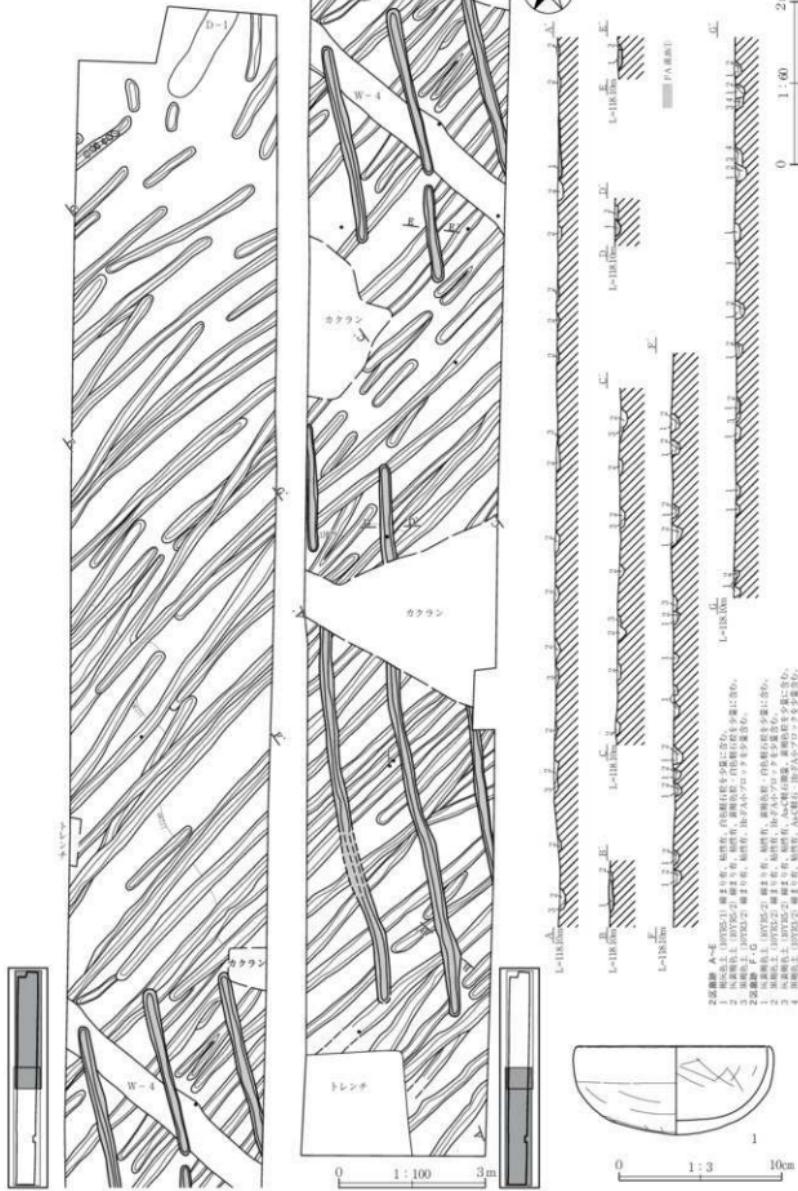
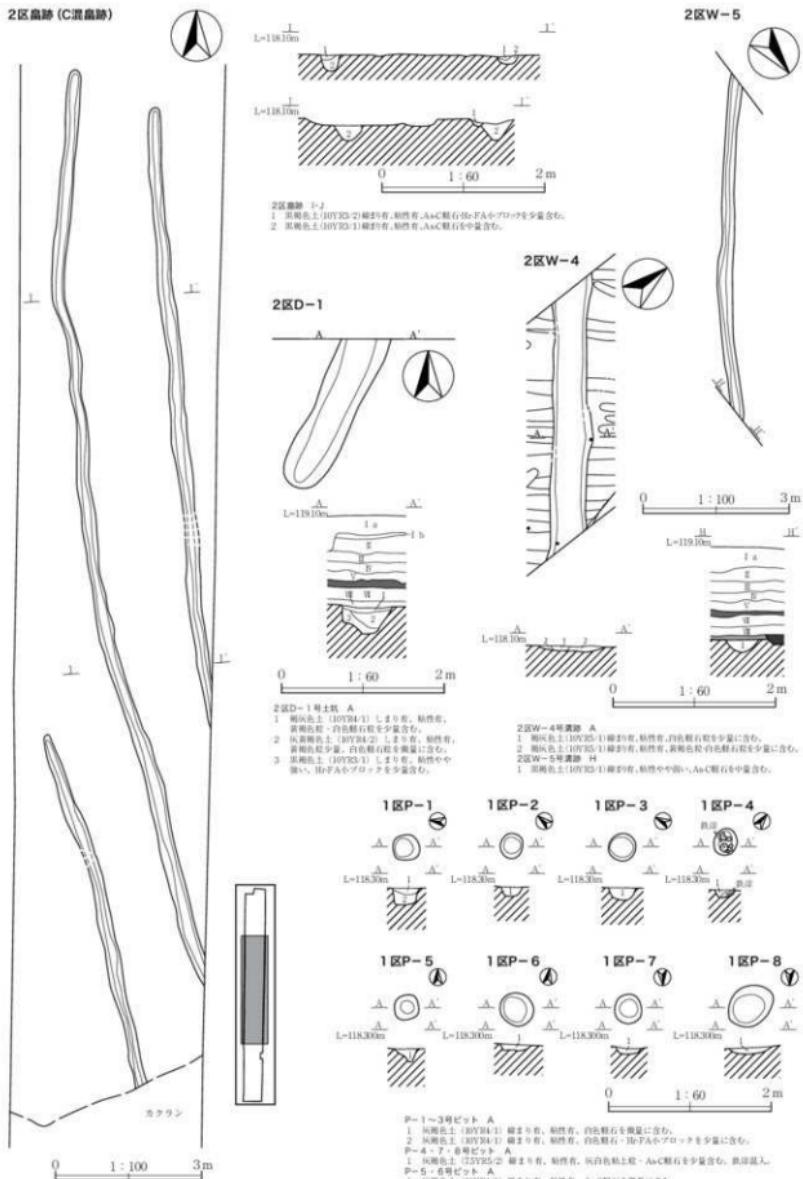


Fig.10 2区晶跡 (FA混晶跡)



2区H-1

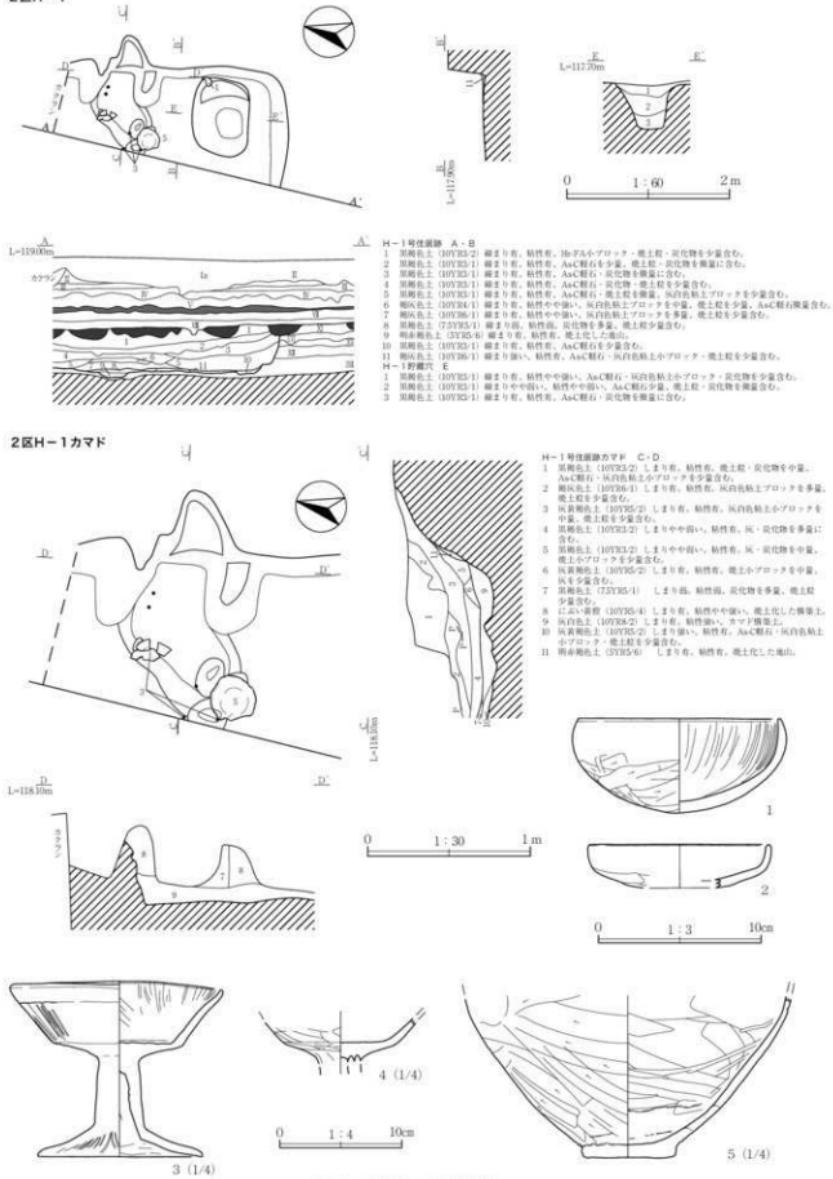


Fig.12 2区H-1号住居跡

1区炉跡

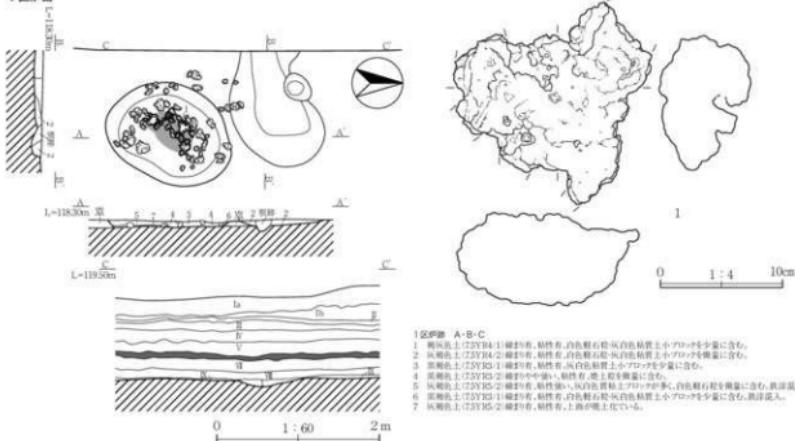


Fig.13 1区炉跡

Tab. 2 溝跡・土坑・ピット一覧表

調査区	遺構名	位置	方位	横長 (m)	上端 (m)	下端 (m)	深さ (m)	断面形状	出土遺物	時期
1区	W - 1	1層、X200・291、Y33	N = 90° E	4.05	0.28 ~ 0.36	0.05 ~ 0.18	0.05	弧状	-	中世以降
	W - 2	1層、X200、Y34・35	N = 168° W	3.35	0.22 ~ 0.31	0.10 ~ 0.31	0.05	弧状	-	中世以降
2区	W - 1	1層、X200、Y37・58	N = 127° E	6.05	0.24 ~ 0.28	0.06 ~ 0.22	0.12	弧状	-	中世以降
	W - 2	1層、X200・201、Y38	N = 91° E	2.48	(0.20)	0.09 ~ 0.28	0.07	弧状	-	中世以降
	W - 3	1層、X200、Y37・58	N = 123° E	2.27	0.21 ~ 0.27	0.09 ~ 0.14	0.10	弧状	-	中世以降
	W - 4	2層、X200・290、Y62・63	N = 139° E	5.85	0.66 ~ 0.82	0.05 ~ 0.59	0.07	弧状	土器片少量	古墳時代後期以降
	W - 5	2層、X200・290、Y57・59	N = 38° E	7.11	0.21 ~ 0.31	0.06 ~ 0.13	0.15	U字	-	古墳時代後期以降
調査区	遺構名	位置	長幅 (m)	短幅 (m)	深さ (m)	平面形状	断面形状	出土遺物	時期	
2区	D - 1	2層、X200、Y37	(0.94)	0.30	0.32	長方形	箱形	-	-	古墳時代後期以降
	P - 1	2層、X200・291、Y34	0.34	0.32	0.20	円形	U字	-	-	古墳時代後期以降
	P - 2	2層、X200、Y33	0.31	0.27	0.15	円形	U字	-	-	古墳時代後期以降
	P - 3	2層、X200、Y33・34	0.35	0.34	0.14	円形	U字	-	-	古墳時代後期以降
	P - 4	2層、X200、Y36	0.33	0.28	0.09	円形	U字	鉄滓 (1125g)	7世紀以降	
	P - 5	2層、X200、Y36	0.31	0.30	0.15	円形	-	-	-	7世紀以降
	P - 6	2層、X200、Y36	0.42	0.40	0.08	楕円形	U字	-	-	7世紀以降
	P - 7	2層、X200、Y36	0.36	0.32	0.09	円形	U字	鉄滓 (1250g)	7世紀以降	
	P - 8	2層、X200、Y36	0.60	0.47	0.09	楕円形	半円形	鉄滓 (2272g)	7世紀以降	

Tab. 3 出土遺物観察表

2区2面

No.	出土位置	種別	基盤	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色調	縦形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	堆積土	土器部	(124)	丸底	5.4	石灰、灰石、小瓦砾	良好	胎土	外側：白泥質粘土ナメナリ、12cmヘタリナリ。内側：同粘土ナメナリ (11.5cm)。胎土が強く不規則。	1号残存、外側復原	

2区 H - 1

No.	出土位置	種別	基盤	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色調	縦形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考	
1	軒檻六 土器	土器部	(124)	丸底	5.8	石灰、白泥、 赤色粗粒	良好	胎土	外側は白泥質粘土ナメナリ、15cmヘタリナリ。 内側は同粘土ナメナリ。	2.5残存。		
2	廻り方 土器	土器部	(110)	-	(26)	石灰、白泥、 赤色粗粒	良好	胎土	外側は白泥質粘土ナメナリ、15cmヘタリナリ。 内側は同粘土ナメナリ。	1号廻り方。		
3	廻り方 土器 底付	土器部	17.5	13.5	14.4	石灰、灰石、 赤色粗粒	良好	赤褐色 赤褐色粗粒	外側は白泥質粘土ナメナリ、15cmヘタリナリ。 内側は同粘土ナメナリ。	廻り方1号廻り方ナメナリ (15cm)、底部ヘタケズリ。 内側は同粘土ナメナリ。	廻り方1・2・3号。	
4	背上 土器 底付	土器部	(120)	-	-	石灰、灰石、 赤色粗粒	良好	胎土	外側は白泥質粘土ナメナリ。 内側は同粘土ナメナリ。	背面は白泥質粘土ナメナリ。	背面残存、口沿部底付。	
5	廻り方 土器 底付	土器部	-	7.6	-	石灰、白泥、 赤色粗粒	良好	胎土	外側は白泥質粘土ナメナリ。 内側は同粘土ナメナリ。	底部ヘタリナリ。	廻り方平手・底部。	

1区伊跡

No.	出土位置	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	材質	焼成	色調	重量	特徴	残存状況・備考
1	廻り方	鉄滓	14.9	11.0	7.5	鐵	-	黒褐色 赤褐色	100kg	半球、不整形圓形。 上部は半球形で底部は不規則に削ぎ下りた形状 で、下方には木炭が見られる。下部 は黒褐色の擦耗化している。	

VI まとめ

元総社蒼海遺跡群（128）では、1・2区共に天仁元年（1108年）に浅間山噴火により降下した軽石に埋没した水田跡、6世紀初頭に榛名山噴火により降下したHr-FAを含んだ洪水層から掘り込まれた畠跡を確認した。本調査区は道路拡張部分という狭い調査範囲で水田跡や畠跡といった生産遺構が主としている。ここでは近隣の調査成果と合せて、本遺跡周辺の生産遺構について若干の考察を加え、まとめとしたい。

1 As-B 軽石下水田跡について

Fig.14は周辺遺跡の住居跡とAs-B軽石下水田跡や古墳時代以降畠跡の分布状況を図示したものである。破線はAs-B軽石の堆積が確認されている範囲である。水田跡は本調査地と元総社蒼海遺跡群

（36）1区で確認されている。また、元総社蒼海遺跡群（14）3・4トレチ、元総社蒼海遺跡群（88）、元総社甲稲荷大道西III・IVでは畦畔は確認されていないがAs-B軽石層の堆積が確認されている。

本調査地では4面の水田面を検出しており、1区では南北方向の畦畔1条、2区では東西方向の畦畔1条を確認した。なお、1区の畦畔は走向方向から元総社蒼海遺跡群（36）の畦畔（7）へ接続すると考える。

水田面は①から③までAs-B軽石の堆積が薄く平均10cmあったが、④ではAs-B軽石の堆積が薄くブロック状に堆積していた。④と畦畔を挟んだ③との比高差は5cmあり、他の水田面よりも④が高かった。④は平坦で水田に伴うものではないがAs-B軽石層（VI層）上位から掘り込まれている耕作痕を確認している。元総社蒼海遺跡群（14）3トレチ、元総社甲稲荷大道西IVではAs-B軽石層上位から掘り込まれた畠跡が検出されており、本調査地の水田面④もAs-B降下以降畠作利用されていたと考えられる。

条里については「群馬県史」¹¹⁾を参照すると本調査地に隣接する道路を挟んで東側は現地表条里遺構が残っていた。本調査地で検出した畦畔も現地表条里遺構に近接した水田跡であることから、条里制区画を構成する地割りの中に位置付けられる可能性もあるが、本調査地周辺は集落域との焼や地形変換点で規制されているため、不規則な区画が北西から南東かけて広がるものと想定される。



2 2区2面畠跡について

2区2面ではHr-FA混土層（Ⅷ層）を掘り込むFA混晶とAs-C軽石混土層（XI・XII層）を掘り下げて確認できたC混晶を検出している。FA混晶は南から北方向の①と南西から北東方向の②の2時期に別けられる。

FA混晶②はサク跡が最も多く76条検出しており、やや軸方向がズレて重複していた。軸方向でグループ別けすると、Aが軸方向N-35°-Eで23条、BがN-46°-Eが25条、CがN-42°-Eが28条の3つに別けられる。新旧関係は切り合いからA→B→Cの順である。また、Aでは残存状況が悪いため判然としなかつたが、B・CではX62、Y290とX66・67、Y290付近でサク間に幅の広い部分が見られるため区画別けされる可能性が考えられる。

FA混晶②と同様の畠跡は本調査地周辺では元総社蒼海遺跡群（14）3トレンチ・元総社蒼海遺跡群（36）1区・元総社蒼海遺跡群（88）・甲稲荷大道西遺跡ⅢD区・甲稲荷大道西遺跡Ⅳが確認されている。甲稲荷大道西遺跡Ⅳでは畠跡が主軸方向N-30°-Wの溝跡に区切られており、北東側は本調査地・元総社蒼海遺跡群（36）1区、南西側は元総社蒼海遺跡群（14）3トレンチ・元総社蒼海遺跡群（88）・甲稲荷大道西遺跡ⅢD区が該当する。北東側の畠跡を1区画とし、確認されている範囲は、南西から北東方向が約60m、北西から南東方向が約87mである。

畠跡の年代は周辺調査の成果でHr-FA陣下以降7世紀と与えられている。本調査地でも6世紀中葉の住居が廃絶後に畠跡が開削されているため、この年代に一致する。

註

(1) 群馬県史編さん委員会 1991『群馬県史』通史編2原始古代2 付図8「高崎市の発掘の位置と現地表差里造構」



1区北 As-B下水田跡全景（北から）



2区W-1・2・3号溝跡全景（北から）



2区As-B下水田跡全景（南から）



基本層序①（東から）



基本層序②（南から）



基本層序③（南から）



2区As-B下水田跡作業風景（南から）



1区北2面全景（北から）



1区中央2面全景（東から）



2区FA混凝跡全景（南から）



1区焼跡鉄滓出土状況（西から）



2区W-4号溝跡全景（北から）



2区FA混凝跡作業風景（北から）



2区W-5号溝跡・C混凝跡全景（北から）



2区H-1号住居跡全景（西から）



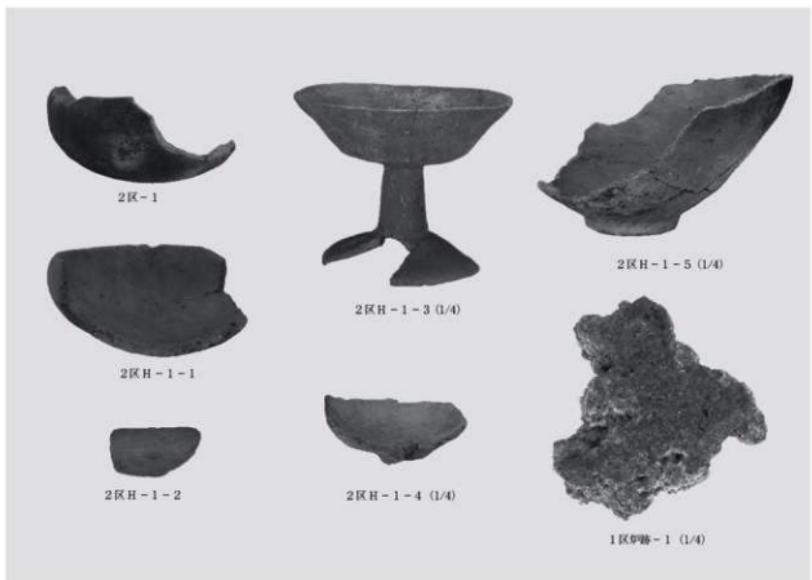
2区H-1号住居跡貯蔵穴全景（南から）



2区H-1号住居跡遺物出土状況（西から）



2区H-1号住居跡遺物出土状況（南から）



報告書抄録

ふりがな	もとそうじやおうみいせきぐん (128)
書名	元総社蒼海遺跡群 (128)
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	-
シリーズ名	-
シリーズ番号	-
編著者名	岡野 茂
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町 1-15-3
発行機関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市総社町 3-11-4
発行年月日	2019年3月12日

ふりがな	ふりがな	コード	位置		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経		
元総社蒼海遺跡群 (128)	前橋市総社町3137-1ほか	102021	30A236	36°23'38"	139°2'28"	20180910 ～ 20181031	648.05 m ² 前橋都市計画事業 元総社蒼海土地 区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元総社蒼海遺跡群 (128)	生産	古墳時代 平安時代	水田跡 溝跡 炉跡 ビット	1面 2条 1基 8基	土器 ・鉄滓を伴う炉跡 ・As-B下水田跡
	生産 集落	古墳時代 平安時代	住居跡 水田跡 畠跡 溝跡 土坑	1軒 1面 3面 5条 1基	縄文土器 土器 須恵器 ・3時期の畠跡 (FA混畠とC混畠跡) ・6世紀中頃の住居跡 ・As-B下水田跡

元総社蒼海遺跡群 (128)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2019年3月2日 印刷
2019年3月12日 発行

発行

前橋市教育委員会

〒371-0853 群馬県前橋市総社町 3-11-4
TEL 027-280-6511

編集
印刷

技研コンサル株式会社
朝日印刷工業株式会社